

# 奈文研

## ニュース

No.74

Sep. 2019

NABUNKEN NEWS



### 平城宮第一次大極殿院の幢旗遺構

宝幢・四神旗(幡)とは、鳥・日月・四神をモチーフにした7本の儀仗旗で、古代国家の最重要儀式である即位式や元日朝賀にのみ用いられました。烏像幢(烏形幢)・日像幢・月像幢・青龍旗(幡)・朱雀旗(幡)・白虎旗(幡)・玄武旗(幡)からなり、『延喜式』などの平安時代の史料や奈良時代後期の平城宮第二次大極殿院の発掘遺構では、主柱に2本の脇柱が付く三本柱式の宝幢・四神旗が大極殿の前で7本横一列に並びます。これらの定型化した宝幢・四神旗(幡)は、変容しながらも江戸時代末まで用いられました。

近年、宝幢・四神旗(幡)の成立と定型化の過程が、発掘調査の成果によりあきらかになってきました。2016年度の飛鳥藤原第189次調査では、大宝元年(701)元日朝賀にともなう藤原宮幢幡遺構を発見し、宝幢・四神旗(幡)の最初の姿が判明しました。藤原宮の宝幢・四神旗(幡)は、主柱のみの一本柱式である可能性が高く、中央に烏形幢が、その東に日像、青龍幡、朱雀幡、西に月像、玄武幡、白虎幡がそれぞれ三角形状をなして、大極殿院南門の前に並びます。「文物の儀、是に備れり」と謳われるこの元日朝賀は、律令国家完成の宣言と一般に理解される古代史上の歴史的一場面です。

そして先頃、1970年度の平城宮第69次調査の成果を再検討した結果、長らく謎だった奈良時代前期の平城宮第一次大極殿院にともなう幢旗遺構を発見しました。第一次大極殿院の宝幢・四神旗は三本柱式で、中央に烏像幢、その東に日像幢、朱雀旗、青龍旗が、西に月像幢、白虎旗、玄武旗が、大極殿の前で横一列に並びます。三本柱式の宝幢・四神旗が7本横一列に大極殿の前に並ぶものへと変化したのは、奈良時代前期であると初めてわかりました。

これらの発掘調査の調査成果により、宝幢・四神旗(幡)は、大宝元年元日朝賀にともなう藤原宮で成立したと考えられ、平城京遷都を経て、平城宮第一次大極殿院において奈良時代前期に定型化したことがあきらかになったのです。ただし、この定型化が平城遷都当初からなのか、それとももう少し時期が下るのか、より詳細な時期についてはまだ研究の余地を残しており、今後の検討課題です。

現在、新天皇陛下即位を記念して、第一次大極殿の復原建物のなかで、宝幢・四神旗(幡)の復元品を特別展示しています。今回は、藤原宮の幢幡遺構の配置を模して展示しました。ぜひ平城宮跡に足をお運びいただき、皆様に古代の即位式や元日朝賀について想いを馳せていただきたいと思います。

(都城発掘調査部 大澤 正吾)



大宝元年(701)元日朝賀の復元(南から)  
(復元した宝幢・四神旗を藤原宮大極殿院南門の前に配置。赤い柱が大極殿院南門の遺構表示、奥の森が大極殿。)



奈良時代前期の元日朝賀・即位式の復元(南から)  
(平城宮第一次大極殿の復原建物の前面に、復元した宝幢・四神旗の写真を合成。)